



重修真書太閤記

三編
九

13
459
29



特 18
459
29

消
福
赤

重修真書太閤記三編卷廿五

水みづ下した藤ふじ吉きち郎らう凱がい陣じんの事
并なら信のぶ長なが若わか州しゅう江え州しゅう仕し置ちの事

同
會
攻
印

水みづ下した藤ふじ吉きち郎らう謀ぼう計けいと以もつて朝あさ倉くら勢せい先せん陣じん一いっ万まん五ご千せん餘じゆ騎き
と々とと秀ひで吉よし自みづか身み是こゝと破やぶて本ほん陣じん二に万まん餘じゆ騎きと竹たけ中ちゆう半はん
兵へい衛ゑい尉ゐ五ご百ひゃく餘じゆ人にんと以もつて亂らん入いりけり義ぎ景けい念ねんあけ敗まひ
走まはりけり竹たけ中ちゆう十じゅう分ぶん乃すなはち勝か利りと得えたりけり朝あさ倉くら家け
數かず代だい弓きう箭やと取とりて當あ國くに汝に管くわん領りやうし武ぶ功こうも世よに聞きこえり
と々とと智ち謀ぼう勇ゆう敢かんの郎らう等らうあやこ相あ從いひあつて聞きこえり不ふ
意いの騷そう動どうふ驚おどろされ士し卒そつ散さん亂らんしけり急いそに取とり鎮ちんす

水月記三編卷廿五

こゝろ共崩し引立られしもの流石名と惜
 ら義よしとめるものあまら踏止りし士卒と励ま
 味方の同士討と制し敵を防ぐんと働く處へ先陣の
 朝倉景恒景鏡前波黒坂ノ葦夜討し追立らば本陣
 の火乃手ふ肝を消し我先と馳返るその勢一万五
 千餘騎あれは本陣まで織田家の勢とおのひ違ひ
 弥仰天あり今前後不覺し逃道とらうりて求め惣敗
 軍とらうりし竹中のおのひの終ふ本陣と騒ぐを先陣
 の勢乃引返すを見しをちや十分の勝利と速し引退
 くべしとて歸りし敵と路と引違えし金ヶ崎へ引
 返り斯ら知れ景恒景鏡のこゝろをんと馳付し見

勢をみられし本陣より大将のし落あひ味方の
 勢一人と見えし刺敵を既し引拂し影もあし景恒
 景鏡あまら討死し味方の死體あまらひや棄
 たりける甲冑兵器と取整へ何れも此大将も待
 ち云甲斐あり加様ふ乱妨せらばしとそ見苦敷
 陣中の有様哉と我身を夜討し逢し棄れしと
 ぞと思ふ或は怒り或は罵りけるいおろしあが
 ら道理あり木下藤吉郎は分捕十分あり竹中と待
 るふ程あり竹中より來り本陣と夜討し義景と追落
 きし始末とたり諸士の働を注進しけし秀吉心地
 よげふ笑まけ感賞のありと與へあたまる内ふ夜も

明^{あけ}の^{めい}の^{せい}の時^{とき}分^{ぶん}ら^りと^と惣^{そう}勢^{せい}三^{さん}千^{せん}餘^{じゆ}人^{にん}手^て負^おい^いて
ら^らあ^あも^もも^も物^{もの}買^かひ^ひ隊^{たい}伍^ご正^{せい}一^{いつ}千^{せん}餘^{じゆ}人^{にん}敦^{とん}賀^か表^{ひょう}ら^り凱^{がい}
陣^{じん}の^い威^い風^{ふう}あ^あら^らと^と拂^{はら}ひ^ひ静^{しず}と^と押^お来^きら^りと^と淺^{あさ}井^いあ^あの
ち^ちら^られ^れ一^{いつ}揆^{けん}爰^{えん}彼^ひ處^こに^に打^{うち}出^だし^し支^さえ^えし^しも^も朝^あ倉^{くら}
乃^な三^{さん}万^{まん}五^ご千^{せん}餘^{じゆ}騎^きと^とた^たふ^ふ物^{もの}も^もを^をさ^さる^る兵^{へい}ち^ちの^のれ^れら^らお
り^りひ^ひの^の終^まは^は蹴^け散^{さん}し^し路^ろ次^じに^にま^まら^らし^しも^も障^{さや}あ^あく^く坂^{さか}本^{もと}ま
て^て歸^{かへ}り^り着^つち^ちり^り此^{この}時^{とき}信^{のぶ}長^のい^い京^{きやう}都^とに^にあ^あり^りて^て味^{あじ}方^{かた}乃^な兵^{へい}
と^と待^{まち}あ^あふ^ふし^し本^{ほん}道^{どう}より^り退^ひく^く二^に万^{まん}餘^{じゆ}人^{にん}の^の柴^{しば}田^{でん}池^い田^{でん}と
共^いに^に路^ろ次^じの^の軍^{ぐん}に^に勝^{かち}つ^つ難^{がた}く^く上^{かみ}洛^{らく}し^し信^{のぶ}長^のの^の御^ご座^ざ所^{しよ}
に^に參^ま上^あり^り軍^{ぐん}の^の次^じ第^{だい}と^と言^い上^あり^りけ^けら^らし^し淺^{あさ}井^いと^と與^よら^りし^し
揆^{けん}とも^も大^{だい}形^{けい}と^と門^{もん}徒^との^の浪^{なみ}人^{にん}郷^{ごう}民^{みん}ち^ちの^のよ^よし^しと^と聞^き食^{じき}信^{のぶ}

長^{ちやう}心^{しん}中^{ちゆう}小^{せう}鬼^き角^{かく}本^{ほん}願^{がん}寺^じの^の門^{もん}徒^とと^とこの^{この}ま^まに^にあ^あら^らか^かり
バ^バ往^{かう}く^く天^{てん}下^げの^の憂^{うれ}と^とち^ちの^のま^まへ^へ一^{いつ}時^{とき}節^{せつ}瓜^か見^みく^くあ^あま^まを^を除^{のぞ}く^く
ま^まの^の有^あり^りま^まの^のお^おり^りひ^ひあ^あま^まを^をさ^さる^る叔^{しやく}本^{ほん}道^{どう}より^り退^ひく^く
勢^{せい}ハ^ハ歸^{かへ}り^り着^つち^ちり^りか^かとも^も後^{こう}殿^{でん}乃^な木^き下^げの^のま^まへ^へ歸^{かへ}り^り來^きら^り
び^び路^ろ次^じより^り朝^{あさ}倉^{くら}の^の大^{だい}軍^{ぐん}と^と合^あ戦^{せん}を^をい^い頗^ある^る難^{がた}儀^ぎを^をん
一^{いつ}万^{まん}一^{いつ}討^{たう}死^しや^やあ^あら^らん^ん心^{しん}許^こあ^あら^らん^ん安^{あん}否^ひと^と知^しら^らん^んか^かた^た坂^{さか}
井^い右^う近^{きん}前^{ぜん}田^{でん}又^{また}左^さ衛^ゑ門^{もん}尉^{ゑい}に^に三^{さん}千^{せん}餘^{じゆ}騎^きと^とさ^さら^らし^し途^と中^{ちゆう}
ま^まへ^へて^て迎^{むか}え^えの^のま^まへ^へ出^でさ^さし^しけ^けら^らし^し坂^{さか}井^い前^{ぜん}田^{でん}畏^{おそ}れ^れより^り即^{すなは}
時^{とき}に^に京^{きやう}都^とに^に發^{はつ}足^{そく}し^し江^{かう}州^{しゆう}東^{とう}坂^{さか}本^{もと}に^にゆ^ゆけ^けら^らし^し木^き下^げ
朝^あ倉^{くら}に^に三^{さん}万^{まん}五^ご千^{せん}餘^{じゆ}騎^きと^と追^お散^{さん}し^し三^{さん}千^{せん}餘^{じゆ}騎^きに^に一^{いつ}人^{にん}も^も散^{さん}
さ^さら^らし^し只^{ただ}今^{いま}坂^{さか}本^{もと}に^に着^つち^ちり^りと^とて^て勇^{ゆう}ま^まし^しけ^けら^らし^し食^{じき}あ^あと^と取^と

行ふ處あり坂井前田秀吉と對面し殿の氣遣いけ
おふりめく斯く御迎へらる仰付らるるや述る
は聞き秀吉涙を流し御芳志の厚きことと感心し三
人打連京都入りけれ信長偏ふ死したる人の蘇り
たる様と限りなく悦ぶあふ早く召出さる軍の
容子と尋ひけりしは秀吉義景の先陣景鏡景恒は
追散し彼等が打棄るゆひ甲冑兵器分捕仕り御
土産は持參せしりて馬廿餘疋鉄炮三百挺その
外品は御覽し入し信長大に感し且驚き一大
事の退口小勢と以て大敵は打破り味方一人も討
ちば剩敵の兵器と奪取歸りて古今未曾有の

手柄と云へし昔より進む軍小勢と以て大敵を破り
しは其の類多し退口も然を敵も追れぬ
わく僅に勢もて勝利を得しその木下一人たりし
末代といへども又あるやし勇士の感嘆頻に
しは秀吉面目を施し是全し秀吉の功より
は殿の御高運と朝倉を滅ぶる時節は折合出會
し藤吉郎は仕合めていと言上をいし信長は
も機嫌よくやして將軍家へも披露ありけりし將
軍家も秀吉乃智謀無雙ありと感賞ありし斯
く信長在京の際淺井朝倉退治の評定ありける
小秀吉やたるへ今度手筒峯金ヶ崎の兩城を責落淺

井ヶ起と一揆と蹴散し無事小歸京よりゆきし朝倉
 小一塩付らと淺井よむと骨と折せられ味方十分の
 勝利とやべし然る小再む朝倉御退治の為御進發あ
 り跡もて淺井父子江南の佐々木と語らひ江州小
 蜂起とら通路自由あはば味方困窮仕るべし
 江州の郷民とも佐々木家の恩顧のものをば六角承
 禎等と語らひんよら一議よめ及むば彼も從ひやべ
 くれゆ敷御大事らるるべし又朝倉と差置を淺井
 小向とをあはし愚將あれとも朝倉も後誥仕るべし且
 淺井一味の門徒等蜂起仕り先度の恥と雪らん企
 ちて加様の敵と制せんあは緩々と計らと其地と縮め

その羽翼と殺し敵の心力を費さし然して後一時小
 討滅しあはしとあは淺井は智勇備せとも勢少ち
 朝倉の勢ふと多うめと愚弱しと謀み足は然ら兩家
 志と一川よあその期あるべしと淺井父子の氣と
 いとだてとて誰も果敢しと荷擔する人ちと勞
 りとて其勢との川と弱しと其の變もあはと謀る道
 さあ有先此度と其終もさし置せられ御歸國の
 のり時江州一鷹狩の御心持とて折く働をせし
 淺井朝倉片時も安心の暇あは苦惱も月日以送り
 自然と財用と失ひやべし又この終御歸國より海を
 共彼等京都よて足長と切上る程のよはよし乍

去用心の為ふゆゑ若州乃諸侍の人質と取約束で固め
ことをあつてさあその上めく諸城の味方の兵を
置せ給ひつゝ一揆蜂起の憂ありゆゑ今無益に御逗留
留ありて御帰國延引し及ひゆゑ淺井朝倉牒し合
を御帰國の路次と塞ぐんと謀るゝ又々御留守の間
に窺ひ濃州へ切入んと為いよる是を容易とてん
ゆゑに菟角今度の一日も早く御發駕可然と勧め奉
りしうら諸將も此儀も同一けりゆゑ信長の尤
と思召され然者若州侍の人質と請取へしとて丹羽
五郎左衛門尉長秀明智十兵衛尉光秀と若州に遣
はさるる兩人彼國より佐垣の粟屋越中守熊川乃

松宮玄蕃允高松の逸見駿河守名郷乃熊谷大膳そ
の外武藤上野介寺井源左衛門等も人質に
しるるあつて丹羽明智あつてを召具し歸京しけし
は信長大に喜られ去り江州乃押の為りておの宇
佐山の城は森三左衛門尉可成永原の城は佐久間右
衛門尉信盛長光寺の城は柴田權六勝家安土山
中川左馬丞同八郎左衛門尉と籠あつる
宇佐山と蒲生郡八幡の山と云永原の野洲郡あり
長光寺は武佐宿あり安土山は長光寺の西なるを
叔長濱は先年將軍あり藤吉郎拜領をて処なれは
この度入部して城を守り領分乃百姓と撫育あり

浅井と押え京都より岐阜への通路と自由ありしむ
へしと仰らるし秀吉その大恩に感謝し速し長
濱え罷向む警衛嚴重よちしこし是ぞ守る柴田佐久
間森中川との持場へ馳行けり

佐々木兼禎蜂起の事

并枚谷善住坊信長に窺視事

浅井下野守久政同備前守長政父子織田家と縁者
の因と断先代誓紙乃約束と立んたり朝倉と味方
し信長の越前敦賀におとほると狭と討んと企
かとも其事成を信長無事ふ京都へ引返しむし
から浅井父子残念よありしも可為様なり再度謀以

廻らるに定めし信長速に帰國ありしその路次に出
逢んと支度せし二日三日過るを其沙汰ありけり
より長政急度思案しけり信長京都に逗留するを
幸なるを朝倉と合せ不意に濃州へ押寄岐阜城に
攻落し其勢小乗り上洛しならんを信長は猛
しものふを怵し只一擧に討取る時節と諸士に集
めし評定ありけり何れ尤の事也と一決しけり直
小越前へ飛脚とを右の趣と告早く出馬しあし勧め
けりしと義景の頃木下小追落され輔の体にて
遊歸りし怖氣のすき醒やらして浅井に謀り同心を以
楚忽し出馬宜しとのびとて終に承知せりけり長

政大ふあをり再應^{まゐ}遣^{つら}しつゝも義景得心^{うけこ}をぞ
長政をせん方^{かた}ちり拳^{こぶし}を握^{にぎ}り齒^はを嚙^かみ無念^{むねん}極^{たぎ}りな
さあうり一手^{ひとて}まで打出^{うちだ}しつゝいもあはれ思^{おも}ひ止^{とど}めけること
いづれの遺恨^{いごん}あはれ信長へ木下^{きのした}り諫^{いさめ}まうり京都若州^{きやうと}江
州^{かう}乃仕置^{しちぢ}夫^{おとこ}く小沙汰^{せうさた}し付^つらる五月九日^{ごがつくにち}京都^{きやうと}以發^{いはつ}
足^{あし}と定められしつゝも猶^{なほ}手當^{てあて}たさるることあつて同
十九日^{じゅうくにち}ふ都^{みやこ}と出^{いで}まひきり然^{しか}るに江州^{かう}の先主^{せんしゆ}佐^さ木六
角^{かく}入道^{にゅうだう}承禎^{じやうてん}先年^{せんねん}より石部^{いしべ}乃城^{のしろ}小隱^{せういん}を住^{すま}如何^{いか}なる
方便^{べんぽう}とありてり江南^{かうなん}と取返^{とりかへ}ささるやとつゝのことも信長
の威勢^{いせい}日^ひく月^{つき}く小廣大^{せうくわいだい}あるより勿^{なほ}く敵對^{てきたい}ありひを
よりの時節^{じせふ}と見合^{みあ}を有^あけるふ今度^{こんど}淺井父子^{せんせいふち}信長と

手切^{てきり}して江州^{かう}ふ於^おり信長と討^うんと謀^まると聞^きわ誠^{まこと}り
能^よ時^{とき}ありいさや一軍^{ひとぐん}とさるやとつゝ先亡^{せんかく}の余類^{よるい}と催^{もよほ}
促^うまうりけるふ今^{いま}追織^{おひ}田家^{でんけ}は怖^{おそ}まは彼處^{かゝ}小隱^{せういん}れ
忍^{しの}む居^いたりける浪人^{らうにん}共^{とも}忽^{たち}に蜂起^{はちうき}し愛智^{あいぢ}の郡^{ぐん}鯨^{しん}
江^{かう}の城^{しろ}は楯籠^{たてかご}り市原^{いちばら}邊^への郷民^{かうじん}と駈^{かけ}催^{もよほ}ふ信長^{のぶなが}の
歸路^{きりぢ}を支^さえ討^うんと計^{はか}りける爰^{こゝ}は勢州^{せいしゆ}朝明^{あさけ}郡^{ぐん}枚谷^{まゐ}
圓通寺^{えんどうじ}の住僧^{ぢゆうそう}善住坊^{ぜんぢゆうぼう}といふ心剛^{しんかう}は武藝^{ぶぎ}とこのも
殊^{こと}小鉄炮^{せうてつぱう}の名^な人^{ひと}らるりけるが佐^さ木承禎^{じやうてん}は語^{かた}らるる
流布^{りゆうふ}本^{ほん}ふ山門^{さんもん}の枚谷^{まゐ}の善住坊^{ぜんぢゆうぼう}朝倉^{あさくら}々^々叡山^{えいざん}乃^の檀越^{だんえつ}
たるよりあはれをひいさし信長と嫉^{あは}れ且^{かつ}織田^{おだ}
家^けあて山門^{さんもん}領^{りやう}と押領^{おしりやう}し納貢^{のうきん}と運上^{うんじやう}をさるること

水戸記三編卷十五

と深く憤り佐々木と合カちし由とありき然も
とと山門に救谷とのみ谷あり善住院へ無動寺ふ
あれとも善住坊ありその上勢州救谷村々江州
愛智郡切畑村への通路より圓通寺に善住坊の
墓とありしへ流布本の説と削去し取す

江州野洲の河原へ出張し信長の帰路で今やくと
待たりける信長へ江州路へ入りしもの急ぐをむと
び緩くと諸方の手當と沙汰たのこし閑馬を打を
らさるる野洲の河原に敵ありと注進しけり
信長冷笑を定めし郷民との一揆なる何程乃
ころあらん弱氣と見をば蹴散しと通るべしと下知

ありけり坂井右近池田勝三郎前田又左衛門佐々
内藏助等真先に進み士卒を励まし佐々木勢乃
中へ面をふりし切て入堅横十文字に駈立られ敵
大勢ありしものいりて織田家の勇士あ及ぶさ四
方へつと散亂したり佐々木承禎大いりて手
勢と勇めし切りあはし信長の旗本勢のつと一
騎當千の勇士なれば敗軍の怖氣付し江州勢忽
小切あらはし郷民共とめ共逸出して敗走
しけるふり承禎入道心より猛りともくひ振
て鯨江の城へ逃入音もをば織田殿々強し合戦瓜
好しありし早し勢州路へ歸り入ありしと詮とふさ

是をれを逃る敵と追棄みし路と開き閑くや押
 あひける威風まゝとみあつて拂ひく勇く敷うけ
 きた彼善住坊り規眼定あつてその上敗軍の士卒
 乃引塩まつき只一駟み駟隔られあそひ遙延けとい
 善住坊遠く望み見み信長莞尔と笑く諸士の勇
 戦と稱羨し浅井佐々木兩家一川まをりて遮り止め
 んと謀るとも是等の者とのみ争てか及ぶこと事
 もあけみ見やらをあみ眼さし誠と凡人をみれば見
 えたりける然る坂井池田一同みやあつて元ふり
 郷民ともの一揆らう恐るつとみあつてねとも佐々木
 ら累代國と所務ししと百姓原は馴染つけれり

此度の企しとも一朝一夕のとはいひまゝこの先所ふ
 又打出て妨とあそんぶらんと存然者いふある禍乃に
 せんを計るべく御用心深きに如くあつては
 蒲生賢秀と案内者として閑道より還御然る
 生の日野の城え入をあつて賢秀父子出迎えお川種
 響應し奉りて後千草越の山路を案内し奉る
 抑この千種越といふ日野より音羽田津畑山を越
 り伊勢國三重郡千種の里より出づ峠より路峻し谷
 深しあつてけり人を通る所なれば蒲生より
 伊勢の國への閑道として常より秘せし道なり今

日の為なみわ究竟くわいけいの処ところと導どう引奉ひきほうでしちりりして
 誰たれうい是こゝと知しづゝ爰こゝふ善住坊ぜんじゆうぼうへ野洲やせうの河原かわらまで織田おだ
 殿とのと打損うちこし安やすうゝぬゝゝいありへとも可ま為ま様さまあゝ種々しゆしゆ
 と心こゝろ成なり碎くださけるか多勢たせいの中なかに交まじりてわ近付ちかづくとも叶あ
 ちびとのいけうゝ打うちを損こすと只ただ我われ一人ひとりひそめて隠かくま
 従したがひ不意ふいよりぬ処ところと計はかるゝと了お簡かん姿すがたと替かへ
 織田勢おだせいの跡あとに立前たちまへふめてゝ伺うかむらゝふ蒲生はらう案内あんないまで
 千草ちくそう越こふめりゝと聞出きこし是これあを願ねがふ処ところの幸さいうを
 わの住す杖谷せうたによりへ峯みねのさして溪たに通とるゝ木の根ね岩いわ
 角かくまで日頃ひごろ月頃つきごろ見馴みな踏ふちとゝ一ひと処ところとや切所せりと前まへふ
 あゝ木蔭こかげより規視ねんと何なにとて打誤うちあやつゝと小躍こたぎし

て喜よろひ勇いさと秘藏ひざうの鉄炮てつぱうは携たづえ千草ちくそう峠とげふ待まちふ
 今いまかゝとらめりゝ程ほどなり信長のぶながの先鋒せんぱう追おく段たん々たん
 小備こゑえゝ九折くしやくの通ととをいゝ一勢いっせい押おめ処ところは
 善住坊ぜんじゆうぼう強藥きやうやくまで二ふた玉たま織田殿おだとのの真直中まぢなちゆうと目當めあてとて
 火蓋ひぶたと切き々たんたんあやまゝに胴服どうふくの袖そでとめりゝ身みふ
 あゝらび
 旅行りょこうの表衣うわぎと胴服どうふくといふと鹿苑院ろくゑん将軍家しやうぐんけ嚴島えんじま
 參詣さんぎの記きみゝゝゆゝ見みゆそれより諸家しよけ小用せうよう
 むらゝと正ただしく古物こぶつの存ぞん存ぞんも少せうなうゝは慶えい
 安やすの頃ころまで羽織はねおりといふものと胴服どうふくと称なづをゝと證しやう
 あゝともゝゝ筋すぢあれいゝらび

善住坊いよ〜立二度玉で込替り打〜の曲
現視つを飛散たり織田勢大驚騒らばら曲
者と捕えんとり〜信長の〜
め命々天あり捨置ゆ〜の屑もせび静々
と馬と進えむ〜や峠と越〜千種の里入ゆ
善住坊この体と見〜舌と巻ひ〜忍ひの〜
て逃の〜たりけ

此時金森五郎八長近佐藤六左衛門秀方た二人
信長に從て千種乃峠と越ると長近朱傘と朱
ぬりの鎧と賜〜て真先進む善住坊打
鉄炮この朱傘みあ〜て身あ〜ら故小傷

つうさ〜と得〜り〜ら〜
服小中〜り長近信長と〜り〜鎧とぬ
め目印の朱傘と賜〜り〜五郎八
後小兵部大輔に任〜天正十年十月三日薙髪
兵部卿法印と云佐藤六左衛門秀方美濃國
武儀郡上有智鈍尾山の城主六左衛門尉清信の
長子なり
金森長近の傳記小千種越の日と元龜元年五月
九日といふ然とを諸記に因り考ふるに京
都発足五月十九日あり〜その夜坂本小一宿
あり〜廿日宇佐山とも或る永原ともいふ

廿一日日野の城入御廿二日千種と越あふとあり
る猶考ふべし

重修真書太閤記三編卷廿五終

重修真書太閤記三編卷廿六

木下藤吉郎秀吉長濱仕置の事

并福鳴市松片桐助作出所の事

民を保ん〜王た〜々あを能禦〜とありとあり
木下藤吉郎秀吉年來の戦功より求めをて立
身富貴の時ふ遇江州長濱の城主となり刺將軍家
より新恩加増の領知と賜らりけり〜と武士の名譽
と心中ふ大悦び長濱入部領分の百姓町人
歸伏あ〜〜むるに仁義と先〜て法令と正〜く
あ〜奢を〜と儉と示〜り民い〜り是〜慕

徳元
分一
長

太閤記三編卷廿六

ひらきしは馴ら四方騒亂のなかりあれとも長濱なる
アツク静謐みして民その業み精と出いあまふあり
自然と豊饒の塚となりけり秀吉あまふ領分安
全の計策と按し出い敵國の間者を探り無頼の依
頼と索めんうたえとて壯士と分ちり村里と晝夜
み限らぬ廻らるを輕敷曲者とは追捕しけるよあり
長濱の領分つら平均は穏やと民枕と高くして
あり但追捕の役人となとてしめよ加藤虎之助
福嶋市松片桐助作三人と首領より付らるたり
元龜元年木下藤吉郎三十五歳よて加藤虎之助
福嶋市松ともは十歳片桐助作十五歳の時なり

但清正記し清正五歳乃時長濱み來りて太閤の
いよゝ木下藤吉郎とやとてあひし時あり側と
をあたを召仕とてしめよれを永祿八年み
あつるその明證を得て
虎之助と秀吉母方の縁者あり加藤の父と秀吉の母
との従弟なりその先祖は尋ねると大職冠鎌足公より
出い河邊の左大臣魚名公の苗裔鎮守府將軍利仁の
後胤なりとも久敷民間に降り尾州愛智郡中村に
住し鍛冶と業とて世計たつとてしめよ五郎助ら
子あり

永祿四年辛酉六月廿四日誕生慶長六年六月廿

四日卒行年五十一歳といふものと云元龜元年の十
 歳たること論あり父を彈正左衛門清忠といひ母
 と太閤の母の従弟女なり清忠永祿七年卅八歳
 ありて早世を時と清正三歳孤とありて五歳
 の時母懷よりて長濱よりて木下藤吉郎の母公
 小中入けるは母公甲斐よりて馳走ありてを傍
 りて養育せらるるは十歳の時前髪を取て似合
 の奉公に勤めたる由と請けけりて即男とやうに加
 藤虎之助と名付百七十石と與へ奉公の身とい
 とりて本書乃説い中より據と知はるるは記
 て参考と備ふ

叔母は福嶋市松は加藤の父五郎助の従弟なり市
 松の母は五郎助の叔母なり太閤乃母堂とを又お
 りていふことあり

朝日物語といふ書に依りて見ると市松の母は太
 政所の姉妹なり市松は太政所の甥にあはると
 いふ又一説市松の母は筑阿弥の姉妹なりとを云
 中村乃桶屋新右衛門と云ひの妻とありて産し
 所なりとをこの新右衛門は三代以前より東三河の
 郷土ありて戦國に習ひ零落して土民となり尾州
 へ來りて住し數十年の間桶の輪をいひて渡せとな
 したりとありてその先祖つまひるありてとあり

一説ふ市松父ハ尾張の國の人あり福鳴與左衛門尉といふ又一説より清洲の大工與左衛門といふものの子ともいふ然ると清和源氏福鳴三郎國親の子孫なりといふ誤也といふなり
 あの市松生なり唯者あり幼少より大膽不敵みして人々ともおのこ氣隨たりし父の新右衛門家職とておぼさるる我手元まで行届くまゝとおめひ七歳の時同職桶屋へ奉公よ遣るけり二年より大柄あり肝太く力もあつた也
 應一小遣うは調法ありけり心より請合引取也話よりとあり市松も傍輩多しと賑く故

おのこが心よ叶ひ半年を過しけるうち八歳よりけりその年の夏傍輩の十六歳ありしものと喧嘩して忽市松相手は疵で付たりその始と問ひこの十六歳あるもの人並に細工もあを故下くの傍輩幼稚の者なり己り心の尽よひ遣ひ私の用迫權柄り言付ありける市松幼稚をこそ短慮の生質その上理非と相應し辨えたり
 彼の者の私乃用ふ市松と呼付嚴敷い付し深憤り市松いし我其方の僕ありその上
 小真乃主人の用ありとて其者の言付を請さる故その者大に怒り悪く小忤めといひさし拳と

擧て市松りあゝあせ一門打たりたり市松益々
 いうる傍に有合ける難又と門取投付たり夏のこ
 け其者の肌脱居たり故肩先は當り二寸むら
 了疵付血影敷出たりとて其者大に驚さあそ
 りや是人殺しと叫びると聞て市松走り寄流
 る血より眼も拭ぞ小さる拳を固め其者の眉間と
 三ッ四ッ打ける処へ家内の者走り来あけけり
 やと言わると市松と引退手負と人抱へ能く見る
 小肩先は疵付る困む体なり小児の事と言わると
 相手は疵付る何の條と市松は問へ市松少
 じ騒るは彼我も自分の用事と權高に付しり

折節主人の用であ居る故我をこのめ仕
 あはれ殊に主人の用ありと答へたり彼奴怒り
 て拳を擧我頭を打ける故我魚刀を投付たり
 たり疵付る彼怒臆病未練めて泣倒る人殺し
 と叫び幸るの憎さ此拳より打返したる追也と
 あは笑あて中けしを家内の輩驚さあはれい
 小兒ありと大膽の仕業かたと叱り戒めて甲斐
 あは疵を浅けれとも血多く出あはれ散亂を
 大に騒動せりこの頃信長の号令あり整む憲法正
 しく故奉行役人在町で度々廻りけるが勿忽この体

と見ほけ市松并ふ手負とも召連奉行所へ出と
下知しけり

市松の八歳を永禄十一年ちり信長らの時濃州
岐阜ふあり

時ふ市松父新右衛門大に驚さ如何なる御咎ふ
かあそんと深く悲大膽不敵のものをなうさけら
一人子の事あり親類打寄相談しけり市松の母
々木下乃母と親し間柄あるはあつて事と
計るべしと鍛冶の五郎助うちけりふあり新右衛門
大に悦び兩人同道し々々木下乃母の歎きけり
へ木下の母頼母敷聞受彌助を使と文とあり

認め洲股へ遣りけり藤吉郎あつて一覽し彌
助ふけり様政道ハ親疎の依怙顛負の沙
汰と為さるるを貴と内縁あり理と得んと
ありんる第一の心得違ひありいふ母の頼を
まへし勝つて公事を勝を負て公事を勝せ
らるべらんやその上我町方の役人ありされし猶
以計らひひかす但聞き如き小事なり一命をか
うるむどの義もあるへり市松もつら八歳い
かあを幼稚なりその上相手死したるはあを
あつて格別の事もあるあり早く馳歸り此由
と告安堵さけり去らるる事濟しち市松以外

へ出さば大切たいせつに養育やしういくなむゆへと申すべしその跡あともて
母御ははのみふこのち如此かくのよきと仰越あやまをいへりゆと申すべしと
彌助やまけと返かへしけしと彌助やまけも歸かへり語かたりけるふ
り木下きのした左様さやういへり上うへへ何様なんやう強つよき御咎おんとがもある處
うづと新右衛門しんえもんとて心落着こころおちつき居ゐたりけるか
果はし木下きのしたの中なかとて如ごとく役所やくしょもてもた意趣いそ
と聞きく追おして何事なんじなく濟さけるふと皆みなく悦よろこむ市松いちまつ
と實父じつふ新右衛門方しんえもんかたへ歸かへりけしへ新右衛門しんえもんも藤吉
郎らうの内意うちいは從したがひ大切たいせつふ手元てもともて養育やしういくありけりそ
のち藤吉郎ふじきらう洲股すまのまたへ親類いんるい共ともを招まねこける頃ころ新右衛門しんえもん
父子ふしとて呼寄よせこしめり市松いちまつと見るに何なんれも凡人たふし
の

あぬ眼まなこさ後のちく用もちふ立たつと心中しんちゆうは悦よろこびや
のち竹中たけなか半兵衛はんべゑ預あづかり軍法ぐんぽうを學まなぶせあるに
術じゆつ早業はやわざも習あひ浮うり終ついふ木下きのした股肱こたうの良臣りやうしんとあり
あ
清洲せいしゆうも傳つたへる處ところら人と殺ころし東國とうこくへ
小田原おだわらの左衛門さゑもん大夫だふ綱成つななりのり仕つかへける心健こころけん
たのしむ左衛門さゑもん大夫だふありけり我苗われなえ
字なと與あえ福鳴ふなみと名乗なをらたりし
叔おじも片桐かたがら助作すけさくと清和源氏せいげんげんじ信濃しんのうの國くに乃すなはち住人ぢゆうじんあり
し父ちちの某その美濃みの國くにも來きり土岐とぎ左京さきやう大夫だふ頼藝たゐげいも
仕つかふ然しかり齋藤さいとう道三みちさんのりめ襲ありて頼藝たゐげい美濃みの

國を出奔しあるのち片桐も浪人し助作の助けあり
 頃父も後を母の養育するなり山家の賤なり忍む
 居たり木下藤吉即洲股に住して近隣を廻り
 見ける時不圖この母子で見出しその小児の眼中清
 威ありて穏しと見とる子細し尋ね問厚
 扶助を加へる終に助作母子の願ふあり洲
 股の城中へ引取是も竹中よあつげ軍法と
 學まなむせけり
 竹中半兵衛元龜元年廿七歳なり
 重治この三人を預りこの如く教導なりけるなり
 心も心中猛りて器量より尋常より越たり

越前小於義景陣と襲ひける時三人童子相應
 小働重治元より士と教ふる道小妙を得たり
 さも夜中といひ殊に不知案内の所なり即
 智を廻ら得て功を立たりといへや三人の働
 と試みてやとて態とわいあたりけるよおひのお
 あみ手柄となりし末頼めしおをひ木
 下よきめ元服せし加藤虎之助清正福嶋市
 松正則片桐助作且元と名乗せけり此者とも幼稚
 あもとも勢高き力量ありけるを以て長濱の領分
 心もあら廻らる民の疾苦を問ふ役人目付といへる
 たり

熟酔の浪人喧嘩の事

并加藤虎之助智計の事

加藤虎之助清正福嶋市松正則二人の血氣さうんうて
勇力そられし壯者ゆえ木下その勇敢を計りあはせ
用むぢぢぢそのころめへ士卒數多を隨て在る村
里を晝夜限らざ目付とて廻らせしとてある
時加藤虎之助長濱城下をこなたを領内と子細み見
巡りけりし長濱領と小谷領との堺を浪人といわ
る武士二人口論を仕出さばぐて喧嘩とあり闘諍も
及ふ一人は色白く髭青く身の丈六尺をうりの大男
といふこまは金剛力士ともいひいづも相形也一人は色黒

眼尖し身の丈五尺をうり小兵なれとも尋常ありぬ
人品ありこまとも互み零落し困窮の体たうり彼大男
へ二盃の村醪を鬱を散し二盃おちて天地を狭しとおを
ひ三盃さらし世とせとせしむらに熟酔のあまう我とこ
まを路次の並樹の蔭をたうり涼しさを草の上
み打倒し前後もあしは心ゆくこれ眼前の極樂界と獨言
して臥りと見えらそのまに鼻の聲高くと眠りけるま
た件の小男も十分の酔心地まであるひら笑ひあるひの
しり足めと定りあらは來りけりいふまのたうらん
過ちし彼大男のあたる上へうめあし倒れり
か起上り大男怒り何者なれい往來し晝寐して道行

侍と引倒すと弓矢八幡照見ありまを堪忍あつてと詔
 了らば彼大男やうい眼でさへ起返りあら理不尽あり
 我等あつて一睡の夢を結び喜見城の樂の最中よ土
 足と踏めけあめら夢でさあけること返りも不
 當らめめら狼藉うらさ覺ありあゝ奇怪や言
 語は絶る曲者め然るであらとてさひもをば却て我
 を罵ると不思議の溢る者あり片手あもたぬ小悴な
 めらち汝り身の為をあらとらその兩足を折て
 去勇士は逢し時教訓されし驗と見あやといふ大
 手と尋け飛越は一件小男少もさうひも侍と打倒
 しと誤るとは刺さぬの過言は及ふと無禮な

と緩急なり遁をまりと切付は大男も堪えぬ抜合を二交
 をせは只二人火華を散して戦ひたる雙方手練の壯者あり
 早業急速の秘術を尽せども勝負の色見えさうはゆめ
 之小谷の淺井の士卒等大勢を來り何処の者あり
 い私の宿意を果さんと斯の如く闘合て所の妨をあらを
 ぬ二人共打倒し生捕やとひめ折れ虎之助行の
 うりあれをさる二人の働さよの常なりぬら徒者ま
 いあさうは足輕とての手あは逢さんめりゆ事あり
 子細と聞きあを取鎮めるとありひ聲を拭きとも彼
 二人戦ふ心を入人の言葉に耳もひげを其内は淺井の足
 輕とも手は長棹を携來り真中取こめ叩き打倒

さんと計りては二人とも大に憤り憎ひ下郎の振舞ひ侍
 の喧嘩を扱ふ作法のあるものをあつこの禮義も知ぬ賤さ
 奴原を方付くそのうち静み勝負を決まらざると言合を
 忽ち二人左右別れ浅井の士卒は打向ひ散らふ切立といふ恥
 をしらぬ足輕とも蜘蛛の子乃散らふ右往左往は敗走は
 然るに彼大男清正の兵士を随え見物して居たりあること
 にも同じく浅井の士卒とおのひあゆみ只一打と打つる
 清正の手乃者是非なく打合たりとあむるで見く清正の
 と走り出彼大男も立むらひあら理も知ぬ侍をか我先より
 其方と聲を上げ争論の傍で聞んとしつても其返辭もは
 我等の手の者へ打つては無休の振舞扱ひ酒は性根を亂

こそしつ然とも見えぬ刀の手のうちはあつ器量の士二
 人犬死せしむると勇士の所行と云へば扱者其方二人
 の強盗の餘類り山賊のよう許さずとて者共續け
 と聲を上げ立踏込みとあみ手捕まると馳りては彼大
 男何とかあつひけん持たる刀をなげ捨つては搦めら
 せしつと覺悟の体清正見るといふつとをこし猶
 豫を以て随ふ兵士も寄難なり大男で生捕た
 り斯とも知り相手の男は浅井の兵士を追ちらし駈戻
 り大男の搦めらしつと見く是れ我等の喧嘩の相手
 也いふも勝負を決まぬは楚忽し人手は渡さへしやや
 加藤の手の者も討つては清正の兵士等は見く

人も顔見合と申も此時酒氣全く醒るれハ慚入て赤面一兎角
 の詞おも及もさうけり良ありて大男の中ける様我等今日鬱氣
 と散さんとありあまう酒家入る一盃を傾けたりしは沈
 酔て身と忘れ大事の命を失らんとすこの悔しき今更面目
 あくいとも一通り我身の上を申べ一某もや父もあつて母一人と
 りてり戦國の只今奉公で稼の相應の有付もあるがとも主人と
 取て身休よあは何時君の為に命を矢ふやうとほもあはれ我死
 したる母と誰う養はんといひありて零落ありて王取と
 朝夕の乏しげれも母の心のあはれ世を安くせよとえなれ一向仕官
 の望を止人は雇も少し分の賃錢で得て一日くと今日まで過
 したる然るよこの程母病は狂さるあやむけくは良醫診察

老病を草根木皮の力不及とぞた心の中処よあうせ逆
 らわとたの事といひけり彌安心のため力せつてけり
 とうい過分の寶を得たは母の口腹を養はんため魚と求む
 に出たり限ある命とさうけり心むすも更ぬ
 別の心なりとさあつ涙のあやうあるとあつたえんためせ
 めて二盃の酒の愁の玉を掃尽してさうけり母の
 顔を合さんとありひしもの魚より好む癖ある上戸のあつた
 二盃三盃の過一悔しきこの木蔭は臥たりし酒の酔猶さ
 めて彼男と争論を仕出我を忘る戦あつち御邊の利解
 肺肝を貫く大死をんとの詞よと忽酔もさめて母のこととありひ出
 一柄めらして狼藉の罪を請ふ彼男と勝負は及らんと心付さ

てふを態と縛をうけけり然るも斯の如く情深き御計は預て
ゆくと我身の悦勿く詞演つてこそ相手の侍衆もとりて知音
みあはれ宿意あることいふも全酒の上にて争ひしことあり
此方小遺恨更にあつた貴邊よもさう某小恨あるさ様も
なれ勝負付く俄我ありと幸よて退去あんとありと
祝着至極と身の上の始終をわらうと虎之助を左どある
身と黙然たり件の相手もあつて聞く返答も及ぶは
更ふ歎息一再度酒は酔ふ如く志をく感心の体も
そのいふに者何とらひ何とらざる必竟次は解り
をさうねり

重修真書太閤記三編卷之廿六終

重修真書太閤記三編卷廿七

井上大九郎加藤九郎等とある事

并木村又藏零落の始終を語る事

彼浪人の大男血氣ふまうせ酒狂の上にて喧嘩を仕出
し刀剣を舞ひし既し性命を誤りへりしを加藤
仁智の計より無事納りしこと喜ぶのあま
り我身乃始末と語り相手の男を宥めしゆ彼小
男感ふ堪えぬありけん黙然とて良少時詞をもち出
さるる涙をわき拭ひしけり人間の盛衰禍
福皆天命と云わたり戦國の習ひ強きと慕ひ弱

ことと苦しめ勢を立し威を競ふと朝暮の所業あるは
我等もいささか習む覺えし藝をりし身立をやとお
りひ立諸國と經歷し奉公と稼し心もろりいたるや
とを零落至極し身を飾るる衣服なり切取を
そへ勇士の常といひあり強盜とあり町人百姓の財へ
を奪ひ取んとも不便の次第と思案して困窮あり當
処と通行せし御邊の木蔭に酔伏たると見ゆの定め
浪人なるへしとおひひ川に能るる衣服の見苦しき
打てろり帯せし刀脇差尋常あるは美事あるは
是も定めて人の物を掠略たるあぶし此の物を行
殺し此刀脇差を奪ひ取ると悪心を生し直し刀を手

と掛し熟睡し一人を害し甲怯至極の振舞ふ
て勇士の恥る処あり然らば喧嘩を仕う戦ふて
殺しこれを取しと心と定め酒店に至り酒を飲熟酔
の体もろりし態と喧嘩を仕う戦ふと三十餘合り
あふ某諸國とわらうあやしの壯士と逢手とあり戦
ひを挑し此男との習練は出合しとなし
あも不思議の若者かあし心中に驚き思ひし何条
あし得ぬしやあしと精力を勵まし戦ひし何処
の士卒もや支え來りて妨げたり故一先と追散
然のち勝負とんとあり内早相手へ虜とふも南無
三寶他の手は渡しし太刀も刀を我手に入らば是

八月廿二日編次十一

ての骨折も水の泡とありあんなこの腹立うらみも再度各々
 を切散きりちりしてとありひ一事も終つひは叶ならば搦ならして天命
 を覺さす得えたる處へ又此男の物語孝行のこわふ恥ちを忍
 ふとの志ありとれく我等われら悪心あくしんとい黑白の相違さういと自身
 慚はむら肝かんを刺さぶく如ごとく後悔こうかいせんとす晴はりて様
 ちの實じつも理ことちるむな我われ最前さいぜん邪見じゃけんの劍けんを振ふるて立た掛かり
 けりふ其事そのこと遂つひさうら全ぜんく我われ手練てんれんの鈍とんさるにあり彼男
 の孝理かうり天てんに通つうし神明しんめいの助けあり處ところをさるる然しかるや
 く過あやまちを改あらむる小憚こわづらとありと存ぞんして明白めいぱくふ我われ悪心あくしんと告つぐ
 あり然しかる何なんの遺恨いこんありて此この終つひに御赦ごしやと蒙かるると天てんの罰
 を遁のがれしと同一どうい理ことと心底しんていとつまは述のけるほど加藤虎

之助しすけ幼弱ちやうじやくあり思慮しりょ深こきと故ゆ二人の壯士さうし乃誠心せいしん
 を感かんとありと歎息たんそくとありあまう懷中わいぢゆうあり一包いぱくの金
 と取出としありと平分へいぶんふ二川にがわに分わかちある一川いちがわを彼大男
 小あさえ御邊ごへん々老母らうぼの所望しよぼうと達たつとありめんとの孝志かうし
 近頃ちかごろ感かん入いるは此金聊このかねなぐら分ぶんちあたつる
 処ところあり尤なほ是我等われら私しの計けいひありは領分りやうぶんと巡見じゆんけん
 不時ふとの災難さいなんありと困窮こんきゆうありある輩たぐひあり善行ぜんぎやうとあ
 あり零落れいらくとありぬのありは是と與ありてさうめした
 る急いそを凌しのぐや猶なほその者ものの志しは應おじて所置ところせりと地
 頭ぢゆうする人の心こころを定め置おき金子きんぎをうり快たく受納じゆなう
 ありて然しかるべしとありまう今日各討果けふのちありあひちをさるる

跡の始末此金を用ひしべし然らば死して生るるも
御邊等身身の始末用むはるる金よて天道の賜と
べし我等うあし金よあしとていふ及む
は國主地頭の私の恩も非ぞ思へ天と拜し地を禮し
老母の病と養ひたまふと丁寧言論し又一川と相
手の男にこそ是を以て衣服を繕ひ奉公仕官を
稼ぎいへかまつて悪心を起さくはと教導を
二人とては幼弱の虎之助情ある厚く詞を感心
しつても落涙よむさひあむしはものもいふさ
けふらやあつて大男のいふ我々既酒狂乃
あまう御領分と騒ぐし誤り入てい今を処の御法

以て夫々所當の罪料は處せらるる天下の御大法
なるべきはその罪を宥らるるの事ありは多分の金
子を被下し事御禮と申さん詞を知り辭却し奉り
ては猶失禮の罪とせぬその上若くは御方の御
芳志小戻りしべし我々如斯落魄見ふ蔭もたかくい
ふとも侍の名とけくを身ふりては千万金も受ま
る筋ありて受て申すもさういふはともこの御金
國主仁惠の賜めのこといむ且年弱き和君の御詞
從ひ拜領仕ゆく母病と養ひし去れとも國主
の惠をうけ國民相當の恩と報むぞ禽獸と等
しめるべくい今この恩を報ひしむしはとも高年多

大開言三編卷上

病の老母ありんともいづちまで左りかく過りや
 母乃百年の後より必參上仕りたまはるは犬馬の代りふ
 めし仕りて賜はるべしと涙ごのふゆさくらどげら相手
 の男もあらず様よ加藤う與えし金子を押しはるこ
 計らざる大恩を蒙り實に御禮申さん詞をいしらば
 報恩のこい誰とてを同一心まては但我等へ母もあく妻
 子もあし何國とさしと心は儲り家もあし衣服と救正へ
 て誰々の許へ推參申へる因由もあし願はるは是より
 直し和君の許ふあり置はるは命と今より任
 を奉るちりしとれとてを既し打とて死とて命
 松和君ふ助けらるし我命あり何とて惜しはるは

の如く零落しとるは元い中國の者父は周防の大
 内み仕りて義隆ぬりの滅ひむしとて他國にあ
 りて死とらる甲斐ある命生たりしと

天文廿年九月二日從二位多々良の義隆郷山口乃
 大寧寺にて自殺行年六十五今年より廿年餘を
 前よりいへ

毛利元就聞はる種々し詞を設け招くれし
 身と山林みりて義を守り殘年を全し忠臣
 の掟を終りゆさその時某幼稚ゆひしを知因の者と
 を介抱し形の如く成長し今年廿一歳井上大九郎
 と申はるし叔父は井上五郎兵衛と申る者あり

毛利一族なる小早川の家も仕宦してりて以て某
と度々彼家へ推舉せんとも勧めぬとも父の志と
おもひて毛利の一族は釋褐心あり今もて牢く仕り
いづるやむらゝ今の荒増をのりて多しとい

井上大九郎長吉へ播州三木郡大村の住人井上
藤左衛門宗清入道の孫なり宗清の長子と與四
郎二男と與次郎といふ與次郎は男子二人ありを
あそち大九郎小九郎あり大九郎弘治元年乙卯
み生を小九郎永禄元年戊午に生る大九郎八歳
よて父の後は祖父ふ養へて十二歳より別所小
三郎長治ふ仕へ十三歳より敵と討つる長治

より野出村と長光の刀を褒義とて宛行ひ長
の字を與へ長吉と名乗をけり長治亡ひての
ち大九郎小九郎共々秀吉ふ仕へ木下将監の組ふ
入天正十一年樂田合戦の時木下将監討死をり
大九郎は丹波の御次丸に仕へ同十五年筑紫陣
の時へ福鳴左衛門大夫に從ふ相應の働をか
一、文禄元年大九郎八歳眼病をりて入道
て草庵と改め京に仕りて加藤主計頭清正太
閤の中へあそと抱え鉄炮の者五十人であつて
祿十石より朝鮮へゆつて先鋒とせり也
朝鮮よての働宇土の城よての勲功の後くあつて

ア一そのち年つりて七十八歳寛永九年八月三日肥後よて終る子孫ハ備前の岡山よ仕ふあはれいふ処と大入同一のびあをく記して参考よ備ふ

虎之助大悦ひ某幼稚うて父よ後をく敷親類とてをあを身也平日寂々くあれハ腹心とあまぶを人を得んことをおのへども定中も所領なけれは技持よぶも力あり各二人ハ無雙勇士ありさあへき大家と尋ねく奉公もあハ相應よ立身せらゆべ一然るよつりある某寸志を感せらる我よ仕えんとしつる条先以過分至極せり去とをのめる

世乃習ひをある某あ一城の主とありねく運ありともいひつる二人志を合を時ハその利と金と断とせつり面々ありあを我と助けく涯分の忠と竭されつる名譽遠く四方よ聞え榮華ハ正しく子孫ハ傳るりあんと満悦の氣色面よあられ自然と主將たるる威嚴備りて見えけりよぞ彼大男を首を傾け項と垂おの涙を押しちけよ信義とありあをの賞祿の多少よのちや新田左中将義貞朝臣小山田太郎高家の青麥と川よ自身の罪とありあ高家よ兵糧武具を送りて軍法と犯せしことを宥めらるる高家よの兵糧武具の

思^{かん}報^{ほう}え^く一命^{いちめい}と棄^{すて}しと^うや^をも^ら見^みを^きぬ^む
わ^いの^こ是^{こゝ}は^わ我^{わが}身^み今^{いま}受^う命^{いのち}の^お親^{おや}も^の云^い川^がさ^さ
君^{きみ}の^み御^ご息^{いき}の^か辱^じぢ^ぢを^なる^は土^{とち}地^ぢと^さ騷^{さわ}う^は役^{やく}吏^し手^て向^{むか}を^し
と^か越^こ度^たよ^りて^た高^{たか}家^け青^{あお}麥^{むぎ}か^り罪^{つひ}と^おあ^らし^く糺^{ただ}さ^す
を^あら^は益^{やく}な^るさ^だ犬^{いぬ}死^しま^へつ^とけ^ると^斯ま^て厚^{あつ}く^めて
あ^られ^しと^義貞^{てい}朝^{あさ}臣^{ぢん}ふ^も生^いま^まあ^らし^き君^{きみ}の^に仁^{にん}義^ぎ心^{こころ}
か^な相^{あひ}手^ての^い井^い上^{じやう}殿^{でん}と^ゆ此^{この}君^{きみ}は^仕つ^んと^約束^{じやく}あ^らし^き
ふ^との^美ま^りと^某も^共に^残り^止ら^んと^劣ら^しく^いお
ゆ^ゑぬ^ど老^{らう}母^ぼの^先途^{せん}と^見て^ぬら^し是^{これ}ま^ての^志を^こ
虚^{こゝろ}し^て専^{せん}し^て若^{わか}き^君と^補佐^そを^らし^て
能^よく^心で^専し^て若^{わか}き^君と^補佐^そを^らし^て

井上大九郎々清正きんせう七歳しちさいの長者ちやうぢやうありあ^らし^き云^い如^{ごと}
く大九郎だいきゅうらう廿一歳にじゅういちさいあり清正きんせう十四歳じゅうしさい天正三年てんせいさんの事
ふ^りて^浅井^{あさ}朝^{あさ}倉^{くら}滅^{めつ}ひ^し後^{のち}と^いふ^べ
某^{たれ}う^住處^{ぢよ}に^當國^{たうこく}の^山の^奥先^{おく}祖^そと^しを^おこ^うあ^らし^き
へ^共宇^い多^た源^{げん}氏^しの^庶流^{しよ}佐^さ々^木の^一族^{いちぞく}木^き村^{むら}又^{また}藏^{くら}と^しを^お
の^あら^しけ^り
佐^さ々^木の^木村^{むら}と^いふ^ら宇^い多^た源^{げん}皇^{こう}子^し一^{いっ}品^{ひん}式^{しき}部^ぶ卿^{けい}敦^{とん}
實^{じつ}親^{しん}王^{おう}の^曾孫^{そう}左^さ近^{きん}将^{じやう}監^{かん}成^{せい}頼^{らい}近^{きん}江^{かう}國^{こく}下^げ向^{かう}蒲^ほ
生^{せい}郡^{ぐん}佐^さ々^木と^い住^すま^しと^し佐^さ々^木一^{いっ}流^{りゆう}の^大祖^そと^いふ^べ
成^{せい}頼^{らい}の^曾孫^{そう}二^に人^{にん}あり長^{ちやう}男^{なん}式^{しき}部^ぶ丞^{じやう}季^き定^{てい}近^{きん}江^{かう}國^{こく}の^追捕^{つぽ}使^しと^補を^らし^て次^じ男^{なん}行^{かう}定^{てい}佐^さ々^木宮^{みや}の^神主^{しゅ}と^い

大門記二編卷廿七

行定の子四人長子定道へ木村に住を因る木村
太郎大夫といふ次男行實豊浦小住を豊浦冠者
といふ三男家行愛智源四郎といふ四男行範真野
五郎大夫といふ木村太郎大夫定道の孫と木村源
次資經といひその子源三成綱一谷よて越前三位
通盛と討たり賞は近江國木村庄の地頭職と
なすもさうこれありのち一族繁多あれはこれ

畧

一門ある佐々木六角京極ともいひ一り疎遠ありゆ
今いひて流浪の身といひ共心なういひるの名残や
て大名も劣るべし存をいひ吾君年を推く

おのころの智略の長たるを勿々老輩も及ぶ
君と守立奉る末代は高名と傳へんと抔
とらう本意ふ

又藏の系圖とて木村源三成綱の弟源吾成胤
の後といふ但佐々木本系圖に成綱の弟源吾見え
成綱の長男木村太郎盛綱その弟源三俊綱その
弟源四郎實綱その弟源吾定成とあり又藏のこと
は後より詳うあり

某幼年より角力とて今年十九歳といふ行さう遠く
いひて程の立つり忠勤とていひて中と盟約暇
と告ぐ立去たり大九郎といふ虎之助は従ひ長濱

さして勇まゆ

清正知行を所望の事

并石田左吉出身の事

加藤虎之助も奇代の勇士と抱え得る長濱へ
 立歸りしのもあの時清正の知行あけられ扶
 持と何とぞんと思惟し多分体で見ろ大九郎い
 ろ我君さの愁ひあふとらうと大丈夫心
 ぶ我憑り米穀の多少をいたのせと諫められ
 清正の頼りおめひゆうて秀吉の前え出
 て中けふ某幼弱といひもちと存する旨のい
 知行と定め給らうといふと余議もなげしや出たり

秀吉聞るとの方し推し知行と宛行ても自身
 小取任相とあるゆへこれ某う手元小部屋住の体
 てあり置也聽て年つめりあゆむはとも相当乃
 知行と宛行ひ即等も分み従ひ抱えらるるは
 へ清正そのことゆゑ戰場へ出ても即等あけし心の
 ちの働うもと因り侍とけえ置る十分軍
 せとゆと存付しとてい言上仕ゆと中秀吉打
 るひ志の如し神妙なること今四海
 るて麻の如し諸國の英雄豪傑大祿と募り世間
 あつたといふ我等さ岐阜の奉公分りてい
 大名の列よかよと因り我等が許つて

去ぬつゝ勇士いひまゝ仕官せりとめは然るも其方を主と頼るゝ二川は命を惜まどといふのやあるはさう了見なきは年ゆのぬら諦のあまぞ今を一時節をまてめといさめら清正おゝ大禄よて抱えらもん抱ゆゝといふ高買侍とて人の笑ふ由承らうては某ら抱え中侍へ今日の扶持方さへいへらありは後日の働は應追ふ取立てりあうふ初より大禄を望むの千石は二千石二千石より三千石と重さう付て主と買替やら所存ゆたのめい某心付は零落し侍しもの中めて意あるを扶持しは五人十人

招き集めいんこ難くもいへらとやびるよ秀吉心中ふ此の既人語らひ得らるも扶助さぶら禄のわさあ加様いひ出ゆのあへさせともいへら者をら抱えらん覺束あと思ひま清正に向む然其方ら即等とめ得いと聞えら如何あるの抱えらと問き清正畏て仰の如くその者ら即是らといて井上大九郎を召連し出せら秀吉とては眼光を骨柄たるく徒物たる見えければ何ある由緒あらく幼弱の清正と主と頼まんとて尋ねら大九郎とて隠る木村と喧嘩を始末加藤

う取扱の穩とら—さよ感かんト主従しゅじゆうの約やくをあ—いとやけ
 不ふい—う秀吉大しうき又感かん心しん—實じつを禄ろくと以もつ—心こころとをば
 義ぎと以もつて身みと立たる志し大丈夫だいじゆうといひひ—虎こ之助しゆすけを
 過か分の郎らう等らうありと云いべも—この弱者じやくしやくも—徒たま
 あ—ト肝かん太た—心しんあ—ま—剛かうた—る生長せいしやうの—ち—あ
 —の國郡こくぐんの主しゆとな—る—汝能なんぢ々々補佐ほさ—て勇氣ゆうきと
 養やしひい—虎こ之助しゆすけも—大九郎だいじゆうらうを腹心はらこころと—て万事ばんじ
 と相談さうだん—その宣のたま—る—に從したがひ主従しゅじゆう一致いちじ—と大勲たいしゆん功こう
 成なた—る—と宣のたまむ清きよ正せい—へ五百斛いほひやくの扶持ふぢ米こめと出いさ
 初はつめ—見参けんさんの—ゆ—とひ—せ—る—と—衣服いふく金銀きんぎんと大九
 郎らう不取ふとを—つ—井上いのかみ感涙かんなみを流なが—長松ながまつの下したに清風せいふう

あ—と聞き—ふ—た—る—此大將こゝろの下したの—と—あ—と—あ—る
 良將りやうしやうの實生じつせいを—あ—る—あ—れ—と舌したを振ふ—る—退たい出しゆひ秀吉しうきら
 井上いのかみと見みあ—る—天晴あつせんの侍さむらいり木村きのむらと—あ—ら—る—と—あ—ら—る—
 勝かちを—る—め—の—あ—ら—る—是これを亦また我手われて不ふ得とく—る—幸さい福ふくあり
 と悦よろこひひ—猶なほ草深くさふか—る—山里やまのあたや日影ひかげも疏とほ—る—谷たにの曲まがひ世
 と道みちと—る—武士ぶしの時ときに侍さむらいりひ明あぬ暮くれぬ細こ—る—流ながれと口
 漱すする憂うれを忘わすれ—る—松まつの風響かぜなづ—る—連つ—る—尋たづねと心こころと—あ—ら—る—
 長濱ながはま在城あの間鷹狩たか狩かり—て自身みづかみ巡見めぐみ—る—神社しんじ佛ぶつ
 閣かくを禮拜らいはい—る—武運ぶゑん祈禱いのちの為ためと號なづけ或ある—る—料足りょうそくを寄附よきふ
 —あ—ら—る—ひ—ら—田え地ちを割わ—る—あ—ら—る—専せん懇誠こんしんと竭げつ—る—け—る
 か一日いちにち觀音寺くわんおんじと—る—山寺さんじと參詣さんぎあり—あ—ら—る—本尊ほんそんと拜らい

一然してのち方丈より暫時休息せんと玄關
み入に住持さあつてをくたつて殊の外に警言命けを
長濱より東ふあつて石田村ありその次に宮川を
の次は観音坂間田等の村々あり観音坂ふむり
観音寺ありと云ふ

秀吉固く制し止めていそをゆる様寺院へ且那の
布施より今日に營むもの之推参の輩をこり
に僧糧を貪ふこといそをゆる我為は響應の心配
かあつて無用な致さる欲ら我より淨財と喜
捨して雑僧達と勞まへ但炎暑のそとて喉乾
けり湯一川給ゆとあり一時然るる駈鳥もあつり

一うの手習のためは日く入寺して在る多容色あ
げあつて少人をしめて湯と獻をむる少秀吉もろ
山寺は似けちの心地して良久見と居るり
推つて今一盞と所望ありげあつて此少人あつて
る様は湯と斟するものこの度の湯ををり熱
つて少秀吉あつて九人あつてと心中に思案
住持に向ひ此人いふあつて尋あつて住持
此近隣の者の子あつていと答ふ秀吉やうて側は呼
まへこの湯は少人あつて汲来るやと問ふと
少人いふも自身斟くゆと答ふ秀吉いふと
一あつて暖たるるりの湯なりと二度

ぬの湯へちと熱く〜うき〜わどあり此程らひら少人
 の心あり〜と問へ少人あり〜と申すや左
 御喉の乾くを〜由よ湯と求めぬあひ
 熱る〜急ふめ〜せ後〜悪うあ〜推量〜奉り
 て〜と煖〜湯と奉り〜然る〜一盞
 と仰せら〜ゆ〜ゆ〜初らど乾く
 せ〜ぬ〜と存〜熱く仕〜と聲
 を詞も清〜げ〜言上〜げ〜秀吉〜
 つ〜聞あ〜行儀〜の顔容〜尋常〜の
 と〜見え〜の上〜心中の智計頼め〜と稱
 羨る〜あ〜然のち住僧〜此少人我〜得〜と〜

あ〜と住持承〜何〜親〜御所望の〜
 聞〜と〜彼少人の父〜と云〜言示〜秀吉の前へ
 出〜秀吉近〜招〜其方の種姓〜あるものを
 問〜少人の父〜様某〜石田村〜累代〜住居仕〜百姓
 佐五右衛門〜と申〜先祖父〜武士〜傳〜と申す
 草川山樵の群〜入〜む〜の名残更〜併悴〜
 人〜何〜武家〜仕官〜せ〜祈居〜御目
 留〜事本望〜か〜旨〜秀吉大
 悦〜少人名〜何〜尋〜名〜佐吉年〜十二〜答え
 中の秀吉聞〜然〜汝〜在地の名〜り〜石田佐吉と名乗〜
 中〜渡〜主従の約〜直〜供〜長濱〜歸〜是〜

朝暮傍と離るに寵愛ありけし終に榮華と身小極め天
下五奉行の隨一治部少輔三成とて江州佐和山の城主廿三万五
千三百石と領しけふらめありたり

一書に石田三成は藤右衛門尉為成の二男あり石田二郎為久より
八代の孫とゆふ為成ありひら佐五右衛門ともの長男水三助
重成二男宗成十八歳の時播州姫路より秀吉に仕へ三百石と受
りてのふ又右筆より百五十石ありとも今按ふ三成の十二
歳は前条み見え井上大九郎の加藤に仕え一正
三年より一年前のとて十八歳姫路に仕ふとて天正八
年のことなり

重修真書太閤記三編卷之廿七終

地味中々身位次高と政を
文向進歩と多量に事同伴は
甲之科一と多入行其井中其政
少借と下拂然人扱も多と在り
毎心此猶早程と筆あり母
黄岡惺然

